



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy
Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.17 2013. 11

シンポジウム「南方熊楠：神と人と自然」

機構長：山田 利明

今年3月に行ったシンポジウム「円了×熊楠—近代日本のエコ・フィロソフィー」を発展させ、南方熊楠のもったエコロジーの意識を明らかにするシンポジウム「南方熊楠：神と人と自然」が、10月12日（土）に井上円了ホールで開催された。今回は和歌山県田辺市南方熊楠顕彰館との共催。荒俣宏氏が「熊楠と紀州的自然観」と題して講演され、特に東北地方の自然認識と対比させながら、南方熊楠のもった動物・植物・自然のあり様について論じられた。その後、熊楠研究の第一線で活躍される唐澤太輔氏（早稲田大学社会科学総合学術院助教）・野村英登氏（本学 TIEPh 研究員）・増尾伸一郎氏（東京成徳大学人文学部教授）・安田忠典氏（関西大学人間健康学部准教授）の4氏から、研究成果の発表があった。続いて田村義也氏（本学 TIEPh 研究員）の司会によって、荒俣氏と発表者4氏とのパネルディスカッションに移り、南方熊楠のもった環境意識や熊楠研究の可能性を論じた。4氏の発表はそれぞれ熊楠のもった哲学的意識や身体観、あるいは説話研究をテーマとするもので、熊楠の学術的意義を明らかにするものであったが、安田氏の発表は、熊楠と田辺に焦点をあてた風土史的研究であった。これらを素材として、パネルが構成され、興味ある展開となった。



シンポジウム終了後、懇親会が開かれ、学長、田辺市長をはじめ、荒俣氏や発表者、あるいは顕彰館スタッフ、田辺市観光協会など多数の関係者が集った。会場には田辺市の名産品が出され、参加者の歓談が盛り上がった。また、当日朝から田辺市観光協会の女子職員が、平安時代の女性の旅装をして学内をめぐり、熊野古道のPRにつとめた。

今回のシンポジウムは、本学と田辺市の初のコラボレーションであり、田辺市長と学長の挨拶では、今後こうした催しを通して、協力していきたい旨の発言があった。本学としても、田辺市に拠点設けることで、研究や成果公開などの際に、大きな利点となるものと思われる。周知のように、和歌山県には、熊野から大台ヶ原に至る手つかずの自然が残されており、エコ・フィロソフィーあるいはエコ・デザインにとっては、貴重な調査研究の対象となる。今後の相互協力が期待される場所である。

(2013年10月12日開催)



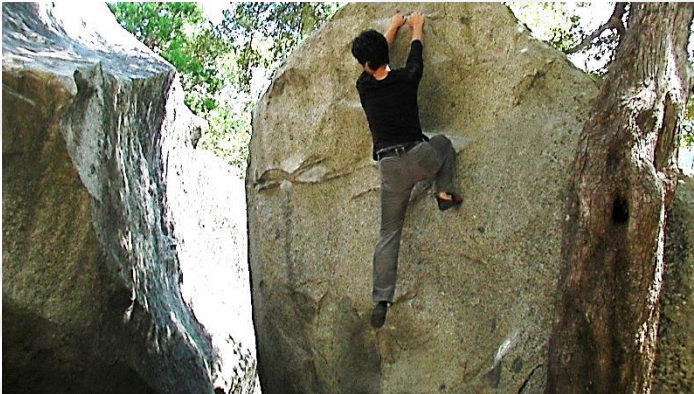
カリフォルニア視察

環境デザインユニット：河本 英夫

海外のスマート・エネルギー都市を視察する試みは、海外事情の複雑さのために、インドと中国は断念し、今年度はアメリカ西海岸を選択した。8月26日にサンフランシスコに到着し、主要ターゲットは北に150kmほど登った広大な地熱発電所の訪問である。サンフランシスコじたいは、海洋の冷たさのせいで夏でも20度前後だが、都市近郊を出ると、亜熱帯性のカリフォルニアの気候が覆っている。11月まで雨がほとんど降らないのである。サンフランシスコ市街の電車は、ハイブリッド電車だと表示されている。坂道が多いので、時々ディーゼルエンジンを使っているのかもしれない。郊外に出ると、枯れ芝生のような雑草が延々と続く。この広大さと人口密度から見て、二酸化炭素削減がほとんど生活実感に結びつかないことがよく分かる。

巨大な前壁で名高いヨセミテ国立公園も訪れた。岩登りでも有名な景勝地である。一部に山火事があり、道路が封鎖されていた。テレビのニュースでも流れるほどの火事である。ところが自然発火による火事であれば、急いで消火しようとはしない。山火事が一定の確率的頻度で出現するのであれば、自然鎮火を待つのである。ヨセミテの休息所では、リスが人間に近づいてくる。このリスにエサをあたえると罰金(200ドル)が科せられる。アメリカの環境政策は、「人為を控える」ことがベースである。

地熱発電所 CALPINE は広大な敷地をもつ。100年ほど前にハンターが発見した間欠泉地帯であり、地熱発電を開始して半世紀以上になる。家庭用の電気だけであれば、サンフランシスコの全家庭の需要を賄うことができるほどの電力を発電している。東京電力管内には、地熱発電を主要電源としているところがある。八丈島である。島民8000人の必要電力は、2本の生産井で賄われている。地熱は、相当大きなエネルギー源である。ところが1997年に施行された「新エネ法」で環境エネルギー対策項目から外されてしまい、地熱エネルギーの研究者、技術者は、職を代えるかアジア諸国に出ってしまった。エネルギー源は、本来マトリックスとして確保されるべきものである。



ヨセミテ国立公園



地熱発電所 CALPINE

(2013年8月26日 - 29日)

第23回世界哲学会議報告

環境デザインユニット：稲垣 諭



23rd WORLD CONGRESS OF PHILOSOPHY

ATHENS, 4-10 AUGUST 2013



PHILOSOPHY AS INQUIRY AND WAY OF LIFE

2013年8月3日より9日まで、ギリシアのアテネで開催された第23回世界哲学会議 (XXIII World Congress of Philosophy) に参加し、Round Table にて研究発表を行ってきた。この学会は、五年に一度行われている哲学のオリンピックのようなものであり、世界各国から研究者が集まり、互いに発表の成果をぶつけ合う学会である。そのため参加人数も千人を超え、ほぼ一週間の学会期間中、何百人もの研究者が報告を行っている。今学会のテーマは、「問いとしての哲学と生命の道 (Philosophy as Inquiry and Way of Life)」であったため、古典哲学の解釈をめぐるワークグループが

ら、生命倫理や環境倫理といった現代的課題に取り組むワークグループまで多様な分野からの発表が組織されていた。ハーバーマスやエーコといった著名な哲学者も参加し、特別公演が組まれていたため、会自体はとても盛会であった。国家財政の粉飾問題が起きて以降、ギリシア経済は低迷を続けているが、そうした経済の復興に貢献することも意図されていたのかと思われるほど、街の至る所で学会の広告が掲載されていた。産業がほとんどなく、観光による収入に頼っているギリシア財政のやむを得なさを見た気もした。

8月6日に私が参加するRT「Phenomenology of place and environmental ethics」が行われ、その中で私は「人間の健康を拡張する環境デザインをめぐる現象学的アプローチ」について発表した。その他の発表は、Jeff Malpas (Australia) が「トポロジーと解釈学」、B. Bruce Janz (USA) が、「現象学とエスノフィジオグラフィ」、河野哲也 (日本) が「環境の現象学的倫理学に向けて」というタイトルで行われた。Malpas と Janz は比較文化、文化人類学的視点から、固有化され、位相化される場所の重要性を説き、河野は生態心理学的な意味での場所についての重要性を説いた。それに対して私は、高齢者や障害者にとっての環境という、より現実に沿った経験から場所の現象学を別決するよう試みた。そのため、ディスカッションでは形式的な理論構想の話と実践的な具体化のはざまをどうするのかが問題となったが、国際的にも哲学研究の水準はいまだ形式的、抽象的、認識論的傾向が強いことが明らかになった。環境と人間の力動的なプロセスの場を設定するには固有のフィールドが必要になる。それはいまだ普遍化できるようなものではないし、かといって個別的事実でもない。その場所の設定こそが、環境の現象学にとっての重要な問題になることが確認されてセッションは終了した。全体的に見ても、充実したセッションであり、活発な質疑応答も見られた。

(2013年8月3日 - 9日)

第1ユニット研究会報告

研究助手：岩崎 大

本年度より新たに TIEPh に参加する研究員のうち、第一ユニットの3名による研究発表会が行われた。唐澤太輔客員研究員は、エコロジー運動の先駆けとして南方熊楠が行った神社社会祀反対運動の根底にある自然観を、西洋哲学の生命論を踏まえつつ掘り下げる意欲的な発表を行った。信岡朝子研究員は、環境問題を伝えるために用いられる環境表象としての写真や図表が、伝える側や伝えられる側によって独自に物語化されて認識されるという事態を、東日本大震災の報道写真等を事例にしつつ考察し、物語化によって隠蔽、抑圧される現実に目を向けることの意義を示した。山本亮介研究員は、現代日本文学におけるエコロジーについて、村上春樹等の小説を基に考察し、とりわけ、古川日出男の近作に現れる人間と動物の関係についての先進的な感覚に、環境意識に対する新たな可能性を見出した。



3名の新研究員による発表は、近現代日本の自然観をそれぞれの角度で探求するものであり、昨年度来第1ユニットの主なテーマである南方熊楠研究のさらなる充実、メディア論を含めた環境問題の伝達に伴う現実への考察、現代小説家による特異な感性から導出される新たなエコロジーの可能性の提示といったように、これまで TIEPh が行ってきた自然観探求を深化、拡張させる実りあるものであった。今後の継続した研究によって、エコ・フィロソフィの学際的な探求と実践を導くことがおおいに期待される。

(2013年7月30日開催)

全学総合講義「エコ・フィロソフィ入門」開講

研究助手：岩崎 大

秋学期より東洋大学全学総合科目として、白山キャンパス、朝霞キャンパス、川越キャンパス、板倉キャンパスをカメラで繋いで行う学部講義「エコ・フィロソフィ入門」が開講された。毎週異なる専門家によるオムニバス形式で、エコ・フィロソフィの取り組みとその意義を学ぶこの講義は、TIEPh 研究員のみならず、連携する研究者を招いて、幅広い視点で展開される。これまでも既に、哲学、自然学、生態学、社会心理学、国際間会議や宇宙開発など、学際性に富む講義が行われている。

エコ・フィロソフィにおいて重要なことは、知識の蓄積ではなく、自ら考え、行動する実行力にある。受講した学生は、毎週講義後に、1. 講義内容の要点のまとめ、2. 講義内容に対する疑問点や自身の意見、3. 講義に関する感想および自由記述、という3点を記述し、ミニレポートとして提出することが義務付けられている。この作業は、学生が講義内容を正しく理解した上で、それを自分自身の問題として消化する力を養うためのものである。全15回の講義で、環境に対する学生の意識と行動の変容を目指し、「エコ・フィロソフィ」の基盤を形成していく。

(2013年9月26日～2014年1月16日)



TIEPh 事務局から

1. 今後の活動予定

TIEPh では積極的に研究成果の社会への還元に取り組んでおり、2013年度も次のセミナーやシンポジウムの実施を予定しています。内容の詳細や参加申込は TIEPh ウェブサイトをご参照ください。

2013年12月15日(日) 12時～17時

公開セミナー第五回人間再生研究会

「認知神経リハビリテーションは何になりうるのか?—システムと経験の再生」

共催：神経現象学リハビリテーション総合研究センター

：NPO 神経現象学リハビリテーション開発機構

※要事前申込

2014年1月11日(土) 13時～17時

シンポジウム「いのちの尊さを考える」

主催：東洋大学学術研究推進センター

2014年2月22日(土) 13時～

公開セミナー「自然といのちの尊さについて考える」

共催：茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)

その他、2014年3月にもさまざまなセミナーやシンポジウムを企画しています。詳しくは、TIEPh のホームページ、または、次回のニュースレター(2014年1月発行予定)でご確認ください。

2. 研究員の新規加入

10月より、新たに客員研究員として、吉田公平研究員、田村義也研究員、王媛研究員の三名をお迎えしました。新たな研究員をお迎えして、TIEPh の活動の厚みがいっそう増すことになりました。今後とも TIEPh の活動にご注目ください。

ニュースレター17号 平成25年11月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp Website：http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/